

「発信力を磨き・想像力を磨いて、医療を変える・福祉を変える」
受講日：2015/7/2 第12回 銭場裕司先生

パパさんの映画。

医療福祉ジャーナリズム分野修士1年
藤原なおみ

「新聞記者になったつもりで」

父は認知症、要介護5、一昨年深秋、いのちを綴じた（閉じた、ではないのだと私は思っている）。パパさんの話しをすると、すぐにベソベソ泣いてしまう私は、裕司先生の授業を欠席しようと考えていた。実は4階の図書館に隠れていた。それでもやっぱり、講義の時間ギリギリにホールに入った。というか、自分自身を無理やり押しこんだ。

始まるとすぐに西淀太郎さんがスリーンいっぱい映し出された。あーダメだ…心臓が苦しい。バッグに手をかけたそのとき、裕司先生は言った。「皆さんも一新聞記者になったつもりで、この話を聴いてください」。

4月に修士一年になった私は、ずっと「ゆきゼミ」が苦しかった。

毎回毎回、私がどんなに父を苦しめてきたのか、どんなにダメだったか、そのことばかりが心に積もっていった。

私にできたかもしれないことが、そこにあった。理想の介護が教壇から展開されてゆく。「今行くべきだ」そう思って入学したのに、私は何のためにここにいるのか自分でもすっかりわからなくなっていた。

うん？今先生はなんて？

「新聞記者のつもりになって」、そうか、ジャーナリストはどうやってジャーナリストたり得るのか、今、最も聞きたいことだ。ここで逃げ出してはいけない。座って、聞いて、考えろ。そう自分に言い聞かせた。

そして、私は最後までちゃんと座っていることができた。

そんな冷静な講義であったことをまず心から感謝したいと思う。「放課後」のお蕎麦屋さんにも行けた。（ありがとうございました。）

素晴らしい監督さん

9年前、父は有料老人ホームに入り、精神病院、認知症専門の病院、そして

東京の郊外にある、あるグループホームに移った。

どうすればよいのかわからない壮絶な日々を経てようやくの思いで、薬もオムツも使わない、「生活」の匂いがする場に辿りついた。

移る前 2 ヶ月、病院で車いすに拘束されていた父が、グループホームに移ったその日に歩き、翌日には目の前の公園に散策にでかけた。

私はその日何年ぶりかで、泣かない一日を送ることができた。

3 ヶ月ほどしたある日、映画監督を名乗る人物から電話が入った。

「お父さんの素晴らしい映画ができました。試写会をしますのでぜひ見に来てください」。

なんの話し??? 私には状況がさっぱりわからなかった。

ホームを確認すると、ずいぶん前から「素晴らしい監督さん」がグループホームの活動を撮影していた。今回が2本目になるそうだ。

「この間、監督さんにお会いにならなかったですか?」「いいえ、会っていません」。

グループホームに入ったばかりの先生（父は小学校の先生だった）と、入ったばかりの若い男性スタッフとの大変な毎日がよかった(?) ので、お父様がメインになった、と。

そして二度目の電話。「素晴らしく感動的な映画なんです」と素晴らしい監督さんは何度も口にしました。

個人情報、父の承認、肖像権、それより何より、私はどんな父が映し出されているか、いやというほど知っている。

怒鳴る父、拳を握る父、スタッフに怒鳴られる父、罵倒される父、暴れる父。感動、とは一体誰の感動だ! 監督さん、あなたの感動ですか? 私たち家族は、その映画をみて何を感動するのですか?

父は、優しく、あったかくて、大きくて、真っすぐで、純粹で、、そこにそういう父は映っていますか? 私はまくしたてた。父の尊厳はどうなるんだ。父は、私たちの大切なパパさんなんだ。

恥ずかしいくらい冷静ではいられなかった。

父は少し太って、スタッフの実家だというお蕎麦屋さんに連れていってもらったりもしていた。そんな様子に少しずつ安心していたことも事実である。

やっとの思いで探し当てたパパさんの居場所がなくなることを恐れ、結局のところ私は腹をくくった。できあがったものはしょうがない…。

そして、そんなことがあったことなど吹っ飛んでしまうくらいの激動の5年が過ぎ、パパさんは旅立った。

それから3ヵ月ほどした頃、「僕、先生の映画をみたんです」と連絡をくれた人があった。自分は先生が大好きだったと。人生に迷っていたときに映画を観た。先生に背中を押されるように介護の仕事へ進み、今は責任者として活動している。もっと早く連絡をとるべきだったと。

私は複雑な思いだった。

でも、父が先生として誰かの力になった、そのことが深く胸にしみた。「認知症の父の時間」が肯定された。あの時、素晴らしい監督さんが言ったように、感動的な映画としてその人の人生にかかわったのだとしたら、それはそれでよかったのかもしれない、とそんな風に思った。

新聞、テレビ、映画、、、自分の思ったこととは別のところで、全然知らない人の人生に、影響を及ぼす。その功罪の狭間で、ジャーナリストが人として逡巡していることも、また、記事にするべきではないかもしれないが、記事にしたいという葛藤が少なからずあることも思いながら、裕司先生の講義を聞いていた。

素晴らしい映画監督は、監督自身の伝えたい何かをカタチにした。その題材が誰でどんな人なのか、その人にはどんな人生があって、どんな家族の思いがあって、今そこにいるのか、そんなことより自分の伝えたいことだけが先行した。私はそう思っている。

そうでなければ、私に取材にきたらう。何故父がそのグループホームにいないか、その本当の理由も素晴らしい監督さんには永遠に関係がない。人生はそんなに簡単なものじゃない。監督さんの想像もつかないことが、知り得ない貴さがある。私たちのパパさんは、ただの認知症の暴れるおじいさんじゃない。私は現在に至るまでその映画を観ていない。

「わが家は、毎日新聞」

これは父の信念だった。私が小学校に入り、一人で留守番することが多くなると、「新聞の勧誘の人が来たら、父は毎日新聞しか読みません、と言いなさい」そう厳しく言われた。押し売りがやってくる時代、既然とした態度で明確にお断りせよ、という教えだった。

「今日、朝日新聞の人が来たの。でも私、ちゃんと言ったわ」「そうか、えらかったなあ」パパさんはとてもうれしそうに褒めてくれるので、私は誇らしかった。父のこだわりが私の新聞観となった。竹橋の丸いビルの前を通るたびに「ここが毎日新聞社だよ」と必ず父が言うので、「ただわ」と笑いながら、みんながわからないことを、わかるようにしてくれるすごい人たちがいるところなんだと思いながら成長した。

パパさんが家を離れ、母だけになっても毎日新聞は、朝夕、毎日届けられた。そして、それは50年、あまりにもあたり前の日常であったためか、何故毎日新聞なのか、その理由を真正面から父に聞くことがないままになってしまった。聞いておけばよかったと今本当に残念に思っている。

裕司先生、父は何故毎日新聞だったと思われませんか？
こんなこと答えようがないですね。

ジャーナリストは、身近にある、いたってシンプルな疑問から取材を進めてゆくのだということ。情熱がなくてはならないが、冷静で、何より公平でなければならないこと。取材対象に敬意を払うこと。そんなことを学んだ。

感情ではなく、事実だけを伝えることで、その問題を読み手の問題にする。事実こそが伝える力である、ということも。

私はコピーライターである。

お気楽に言えば、クライアントにラブレターを書くのが仕事だ。たった何文字かでクライアントの思ってもみなかったことが表現できて、私の仕事となる。でも、そこには事実がなくてはならない。やはり事実こそが最も伝わる力だ。

さて、ジャーナリズム。

私自身がどんな風にそれを捉えてゆくか、苦しんでいる。一步でも前進したいが足元は危うい。おまけに心は喪の作業中である。笑

とてもたくさんのことを考え、得ることができた授業でした。

(大阪のおばちゃんが日本を救うだろうことなども)。

そして、考えることから逃げないでいられた授業でした。

ありがとうございました。

藤原(あつや)なおみ